

四 今、城山は黙して語らず

―謎の武将・多久太郎宗直と郷土―

佐賀県のほぼ中央部に位置する多久市、その南西部にあたる多久町には、国の史跡とともに重要文化財である「多久聖廟」や、城山、西溪公園があります。このあたりは、武士が政治の実権を握っていた鎌倉時代から江戸時代末期まで、多久市一円の政治の拠点になったところです。

地域の人たちから城山と呼ばれているこの小高くそびえる山は、今、緑の木々におおわれた自然の山で、特別変った山には見えませんが、その名が示すように、かつて、ここには城が築かれていました。

しかし、城が築かれた形跡は、今、ほとんど見当たりません。ただ、「中腹にあるくぼ地は、城の井戸跡では？」「この石は城の石垣では？」また、「落城の時の脱出用地下道の出口が南の山麓にあるのでは？」などの伝説もあって、城山は多くの謎とロマンを秘めた山です。

さて、皆さん、いつの時代に、どんな武将が、ここに城を築いたのか、また、その時代のことながら、今日、私たちの郷土とどうかかわりを持っているのかを調べていけたら、楽しいでしょうね。

では、さつそく、時代を大きくさかのぼり、源平合戦を経て源頼朝が鎌倉幕府を創設したところに目を向けてみましょう。



多久太郎宗直肖像画（延寿寺蔵）



城山 (多久市多久町)

伊豆(静岡県)に挙兵した頼朝は、五年間の戦いの末、一一八五年、壇ノ浦(山口県)で平氏一族を滅ぼしました。そして、鎌倉(神奈川県)を本拠地として各地の武士を家来にしながら勢力を広げていった頼朝は、国ごとに守護を、平氏の領地だった荘園や公領などに地頭を置き、全国を支配するようになりました。当時、佐賀県は、肥前国の一部で、守護・武藤資頼の配下にあつたようです。武藤氏は、後に小貳を名のり、九州地方を統制する鎮西探題となりました。

また、地頭では、地元の有力武将で頼朝の御家人になった佐賀郡の高木氏、三養基郡の綾部氏、東・西松浦郡の松浦氏、当時は小領主で、のちに戦国大名になる佐賀市の龍造寺季家、松浦党で知られる伊万里市の源六郎圃などがいました。頼朝の直属の家臣で佐賀

の地にやって来た武将には、小城郡に千葉氏、武雄市に橘氏、そして、「城山」に城を築いたといわれる多久太郎宗直がいたようです。

いったい、多久太郎宗直とは、どんな武将だったのでしょう。現在、宗直について、当時の確かな文献は見当たりませんが、これまでの研究で次のようなことが伝えられています。

宗直は、一一六七年、摂津国難波(大阪府)で生まれ、父の津久井義高の一族は、神奈川県津久井町一帯を支配していたとも言われます。

宗直は、頼朝が挙兵するとすぐ駆けつけ、各地の戦場でてがらをたてました。

宗直一族の供養塔。左端は宗直の供養塔 (多久市南多久町庄 延寿寺)





宗直が3連勝した
朝比奈三郎との相撲

その功績が認められ、一一九一年（建久二）、地頭職に任ぜられ一族郎党三百人を率いて今の多久市南多久町庄にやって来たといわれています。

このことについて、宗直の相撲伝説があります。江戸時代に書かれた本によると、「宗直は、頼朝の面前で、朝比奈三郎との三番の相撲を続いて勝ち、頼朝から日本国中の多久と名のつく所はすべてやると言われて、多久の庄に下向してき……」云々と。朝比奈三郎は、実在した人で、体も大きく強力無双の武者だったようです。

宗直は小柄だったと伝えられているのに、あつぱれでしたね。庄にやってきた宗直は、姓を津久井から多久に改め、さつそく、館城を現在の安国山延寿寺の場所に築きました。現在、陣内城と呼ばれています。

庄の地名は、莊園からそう呼ぶようになったようで、延寿寺の北東に位置し、すぐ近くにある増富遺跡から、平安末期の遺物がでています。当時、この一帯は開発の進んだ地域で、宗直は、まず、ここを拠点にしたようです。

現在、農業中心のこの地域に、中小路、上田町、むく町、やない町、おおき町、さいく町、陣の内、陣の裏、外周り、新屋敷などの地名が、延寿寺を中心にして残っています。当時がしのばれて、想像するだけでも楽しいですね。

宗直は陣内城を築くと、高野神社の造営にもとりかかりました。祭神は、和歌山県・高野山の東北東にある丹生川上神社（奈良県）の分霊・丹生都比売です。宗直が朝比奈三郎との相撲で必勝を祈願したと言われる神社の祭神です。

高野神社（多久市南多久町西の谷）
宗直にちなんで毎年10月相撲大会が催される





梶峰神社。宗直が鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮から分霊を迎えて創建したといわれる。別名若宮八幡宮（多久市多久町東の原）

ところが宗直は、その後、三キロほど西の多久町の「城山」のふもとに移ることになりました。どうしてだったのでしょうか。低い丘の陣内城は仮の城であり、幾多の戦場を経験した宗直は、多久の地勢や世情を調べ、中でも北多久町相の浦に居城をもつ土着の実力者・相神浦氏とも親交を結び、要害堅固な築城の場所を探していたと思われます。また、新たに土地を開発するために新天地を求めていたとも思えますね。ここは、宗直の考える条件にあった場所でした。そして、新たに神社寺院を造営し、荒れていた多くの寺院を再建して民心の安定や治安にも努めたようです。

いつの日か城は、ラクダのこぶのように連なる三個の峰を利用して、中央に本城を、その前後を雄城、雌城で固めるようになっていたようです。また、城山の正式な名にちなんで、梶峰城と呼ばれました。

こうして、宗直が、多久市にやって来たと言われているから三百五十年ほど、平和な時代が続きました。しかし、戦国時代にはいり、多久宗直の時、さすがの梶峰城も一五四五年、龍造寺・千葉連合軍の激しい攻撃のなかで落城しました。その後、幾多の変遷をへて大坂夏の陣後、一国一城令で廃城となりました。

今、私たちは、宗直にかかわる社寺やその伝統行事を通して、郷土の人たちから知勇の武将と慕われながらも、多くの謎につつまれた多久太郎宗直に思いをはせ、当時をしのび、歴史を想像することができそうです。

城山は、地域の歴史に大きくかわり時代の流れを見てきたことでしょうか。私たちに、黙して語らず、歴史をひもとく楽しみを残しているようです。